

**グローバル時代の企業が求める  
人材の育成について（提言）**

**～大学教育への期待～**

平成26年11月

四国経済連合会

## はじめに

経済のグローバル化が急速に進展する中、企業の海外展開が進んでいる。四国の企業においても、グローバル競争を生き抜くうえで必要な能力・資質を備えた人材へのニーズが高まっている。しかしながら、四国の企業では「そうした人材の確保が四国では難しい」「人材育成には大学の役割が大きい」といった声が多い。

そのため、四国経済連合会では、グローバル人材の育成に関して会員企業や四国内外の大学への調査等を行い、大学における人材育成のあり方を中心に検討を行ってきた。

また、当会は、会員企業の海外実務経験者が四国の大学生を対象に海外ビジネスの楽しさや持つべき素養などを伝える「グローバルチャレンジセミナー」を継続実施しており、そこでも多くの重要な意見が示されている。

こうした取り組みをもとに、当会は、グローバル競争時代において企業が必要とする人材像、ならびに人材育成に向けた大学への期待について、以下のとおり取りまとめた。大学におけるグローバル人材育成に活かしていただければ幸いである。

# グローバル時代の企業が求める人材の育成について ～大学教育への期待～ (提言)

経済のグローバル化が進み、海外展開する企業が急速に増えている。コストの安い生産拠点としての進出に加え、少子化・人口減少で国内市場が縮小する中、成長するアジア等のマーケットを積極的に取り込もうとする動きが加速している。

(参考1)

こうしたグローバル経済の中にいるのは、海外に事業所を持つ企業や輸出を行う企業だけではない。国内市場だけを対象に事業展開しているように見える企業においても、グローバル化の波は押し寄せており、世界的視点での発想や行動力が全く不要という企業はほとんどないと言ってよい。

また、国内外での競争の中で企業が成長してゆくためには、独自の強みを発揮する必要がある、新製品開発や新ビジネスの創出など、イノベーションの継続も欠かせない。

こうしたグローバル時代を生き抜くための企業の活動を支える人材を、今、企業は強く求めている。

## I. 企業が必要とする人材像

何事にもやる気・意欲を持って取り組むことや、仕事に対する強い信念や使命感を持つことは、どんな時代においても社会人・企業人として欠かせない基本的要件である。最近の大学新卒人材について、そうした資質が十分でない面も指摘されるが、企業は社会に役立つ製品やサービスを提供することで存在し、また常に変化する事業環境の中で生き抜いてゆかねばならない組織であり、それを支えているのは社員の強い意欲や使命感であることを学生諸氏には認識してほしい。

その上で、企業が今必要としているのは、グローバルに活躍する人材であり、また、時代の変化や社会のニーズを事業に結びつける人材、すなわちイノベーションを作り出す人材である。具体的には、次のような資質・能力が求められる。

(参考2,3,4)

### ① 旺盛なチャレンジ精神

企業のグローバルな活動が拡大する中で、社員が海外で働く機会は増えている。一方で海外留学者が減少するなど学生の内向き志向が懸念されているが、世界に積極的に踏み出し、新しいことに挑戦し経験を重ねることは自らを成長させることに繋がる。

また、企業が活力を維持してゆくうえで欠かせないイノベーションを生み出すには、技術やビジネスの専門知識を運用し、新しいモノづくりやビジネス改善に結びつける力が必要であるが、それは、既成概念にとらわれないチャレンジ精神からもたらされる。

### ② 課題解決力など自ら考え行動できる力

海外とのビジネスにおいては、日本の常識とは違った相手国の慣習や嗜好により前例のない新たな問題が持ち上がる。これについては様々なビジネス知識をもとに、柔軟な発想で課題を解決する力が求められる。また国内外を問わず、ビジネスの現場は日々変化しており、臨機応変に対応しなければならない。

さらに、イノベーションを興すにあたっては、課題を発見し具体的解決策を考える力が不可欠である。

### ③ 多様な文化・価値観への理解力

外国人をビジネスパートナーとして相互信頼しつつ仕事をしてゆくためには、日本とは異なる外国の文化、歴史、宗教、生活様式などを理解し、多様な価値観を認めることが不可欠である。そのため、世界の出来事や国内外の歴史・文化を語れる素養も必要である。また、外国人に限らず、価値観の異なる人と積極的にチームを組み、新しいものを作り上げてゆく力もイノベーションにとって重要である。

### ④ コミュニケーションツールとしての英語能力

海外との取引が増え、海外で活躍する社員にとっては、外国人を相手に自分の意見を的確に伝える「英語によるコミュニケーション力」が求められる。また、国内においても、グローバルな取引や外国からの来訪者増加に伴い、英語での対応が必要な機会が増えている。実際に四国の企業でも、グローバル展開が加速している製造業などでは、大学新卒者に実用レベルの英語能力を期待する企業が半数近くに達している。しかし、現在、日本人の英語力は、アジアの中でも韓国や中国の後塵を押し極めて低位にあり、国際競争力の面から問題になっているが、企業にとっては実務面から社員の英語力強化がますます重要になってくる。 (参考 5,6)

## Ⅱ. グローバル人材育成に向けた大学への期待

前記のような人材像の育成において、企業の大学への期待は大きい。四国の大学では、そうした人材の育成に向けて、一部限定的ながら新たな取り組みがなされているが、今後、企業と問題意識を共有し、グローバル時代の企業が必要とする人材育成の取り組みが推進されることを望みたい。

それによって、企業が求める資質・能力を持った新卒者が輩出されることが四国の大学の競争力強化にもつながると考える。

### <提 案>

#### ① 挑戦心や課題解決力等の養成につながる学習方法の拡充

全国では教員と学生が互いに議論しながら授業を進める「双方向型授業」や、企業や社会が抱える具体的課題の解決策を学生に考えさせる「課題解決型学習(PBL)」など、学生の自主性・主体性を重視した教育を実施する大学が増えている。(参考7)

四国の大学でも、地域の企業を訪問し経営者や従業員との対話を通じた課題発見とその解決に取り組む授業や、地域社会と連携したフィールドワークを取り入れた授業が導入されつつあるが、これは学生が習得した知識を実際に社会で役立てる意識や能力を高めるものであり、一段の拡充を期待する。

#### ② グローバル人材、イノベーション人材育成の組織・仕組みの構築

グローバル時代に求められる人材の育成に向けては、学生がそのために必要な能力を進んで身につけたいと思う意識付けや、人材育成についての教員等の役割強化、科目・学科を超え連携した教育・カリキュラム編成などが望まれる。

そのため、大学がグローバル人材育成に向けた教育方針明示のもと、学内に、そうした役割を統括する人材育成推進部署を設置することも考えられる。

また、グローバル人材やイノベーション人材として欠かせないのは基礎となる幅広い教養であり、大学での教養教育強化が求められるが、同時に、英語や歴史文化など広範な教養は高校までの教育が重要であり、大学には、そうした教育機関との連携・支援も期待される。

### ③ 実践的な英語教育を中心に大学の国際化を進める取り組み

全国では、すべての講義を英語化している大学や、すべての学生に海外留学を義務化している大学、一定期間、外国人留学生と日本人学生を共同生活させている大学もある。(参考7)

四国の大学でも、海外大学との間の交換留学制度や、留学を義務化する特別コースの設置、一部の講義の英語化などの取り組みが始まっており、こうした取り組みの拡充が求められる。

また、大学に在籍する外国人留学生と学生との交流を活発化し、実践的な英語コミュニケーション力の育成や国際感覚の醸成につなげてゆくとともに、大学内の国際化に寄与するような学生の自主的活動を支援するなど、四国の大学をグローバルな環境に置く積極的な取り組みを期待したい。

以 上



## 参考資料

(参考1) 製造業における海外売上高比率・生産比率の推移

(参考2) 四国の企業が必要とする人材

(参考3) 企業が大学新卒人材に求める資質・能力と実際の評価とのギャップ

(参考4) 四経連「グローバルチャレンジセミナー」における各講師の発言内容

(参考5) TOEFL(iBT)の国別ランキング

(参考6) 企業が大学新卒人材に求める外国語能力

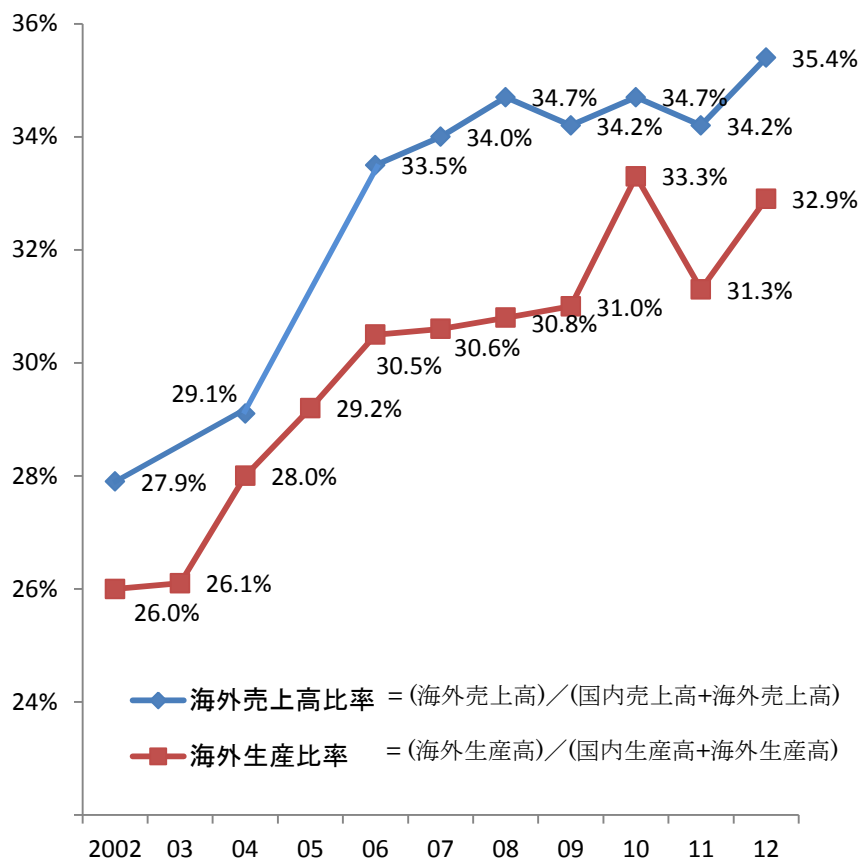
(参考7) 先進的な大学の特色ある教育プログラム

① 国際教養大学（秋田県秋田市）

② 北陸先端科学技術大学院大学（石川県能美市）



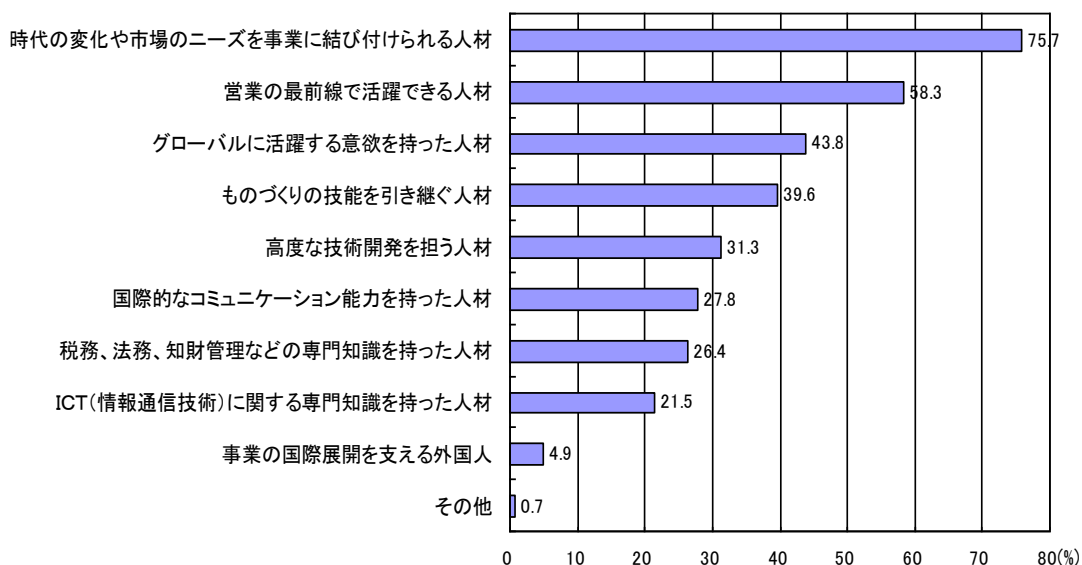
### (参考1) 製造業における海外売上高比率・生産比率の推移



出所：国際協力銀行「わが国製造業企業の海外事業展開に関する調査報告」

調査時期：平成 25 年 7～10 月  
 調査対象および回答数：製造業で海外現地法人を 3 カ所以上  
 (うち生産拠点 1 箇所以上を含む) 有する 992 社のうち 625 社  
 各比率は、回答企業の申告値を単純平均したもの

### (参考2) 四国の企業が必要とする人材

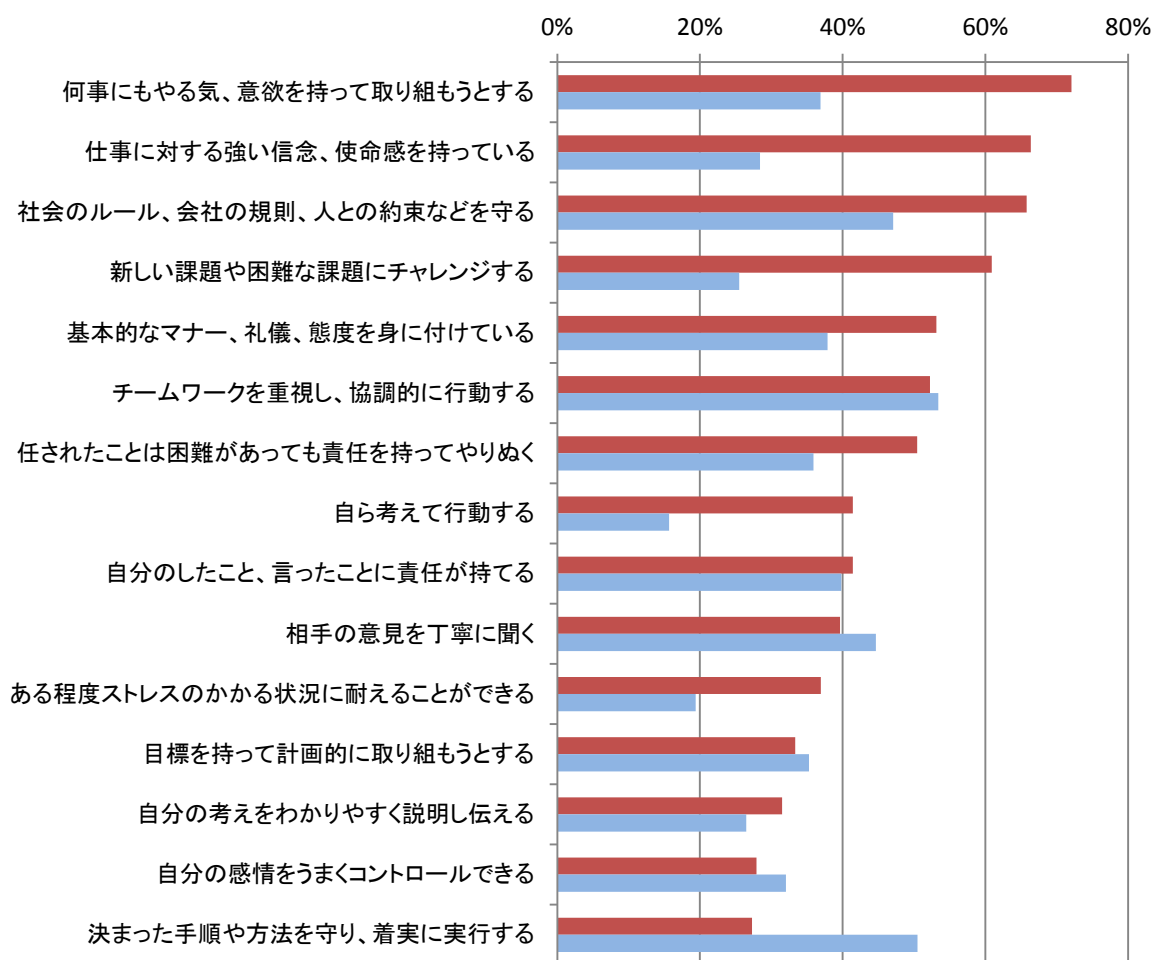


出所：四国に立地する企業の競争力強化に関するアンケート調査

調査時期：平成 22 年 9～10 月  
 調査対象および回答数：四経連会員企業 252 社のうち 144 社

### (参考3) 企業が大学新卒人材に求める資質・能力と実際の評価とのギャップ

(企業が新卒人材に求める資質・能力の上位15項目を抜粋)



■ 企業が新卒人材に求める資質・能力

(当該資質・能力について、①と回答した企業の割合)

<選択肢>

- ① かなり重視する
- ② やや重視する
- ③ あまり重視しない
- ④ ほとんど重視しない

■ 新卒人材に対する企業の実際の評価

(当該資質・能力について、①と回答した企業の割合)

<選択肢>

- ① 問題を感じる学生はほとんどいない
- ② まれに問題を感じる学生がいる
- ③ しばしば問題を感じる学生がいる
- ④ 多くの学生について問題を感じる

出所：四国の企業の大学新卒人材の採用ニーズ・評価に関するアンケート調査

調査時期：平成25年6月

調査対象および回答数：四経連会員企業250社のうち117社

中国・四国地域連携会議（中国・四国地域の大学、県、四経連・中国経連をはじめとする経済団体等で構成）の調査の一環として実施。

## (参考4) 四経連「グローバルチャレンジセミナー」における各講師の発言内容

### 【A社講師】

上海での新工場立ち上げにおいて、総責任者としてマネジメントに苦慮していた時、現地人リーダー4人が一丸となってフォローしてくれミッションを見事に完遂できた経験から、語学力はもちろん、それに加え、人の心に響くコミュニケーション力、環境変化での肌感覚としなやかさ、人材を育成することの重要性を痛感した。

大学生には、固定概念にとらわれず、視野を広く世界に向け、新たな価値を創造する「クリエイティブ力」を磨きあげてもらいたい。

### 【B社講師】

5年間の米国勤務経験では恥ずかしい思いや悔しいこと、苦勞したことなど様々な経験をしたが、失敗を恐れずにチャレンジしてもらいたい。失敗しても次への経験になる。

大学生には、常に世界に目を向け、世界レベルを意識してもらいたい。自分が何をできるのかを考え、必ずできると信じるのが重要である。そして、どのような変化にも対応できる自分を構築してもらいたい。

### 【C社講師】

海外留学中、マーケティングの講義で唯一の日本人留学生としてトヨタのジャストインタイム生産方式の説明を求められ、冷や汗をかきながら説明した経験があり、度胸の必要性和幅広く知識を持つことの重要性、そして相手に理解してもらうための発信能力の大事さを学ぶことができた。海外勤務経験からは、担当業務に対する自発性や主体性、問題・課題への解決能力、メンバーとの調整力などについても、国内にいるときよりも深く学ぶことができた。

自らの経験から言えることは、枠の中にいるのでは、成長が少ない、違う世界に一步踏み出して行動に移し、経験を積み重ねることが重要であるということ、またグローバルな人材とは、必ずしも英語ができる人という意味ではない。価値観の違いを認識し、それを「面白い」と感じられるようになることが、グローバル人材への近道ではないかと考えている。

### 【D社講師】

これまでに外国人の様々なボスに仕えてきて、泣きたくなるような苦勞もしてきた。一方で素晴らしい方々からマーケティングなどを教えていただいたことが今の私の礎になっている。グローバルで活躍している方々を見て感じることは、自分の専門性を持っていることである。また、前向き思考で、積極的なコミュニケーション力を持つことも重要。英語力だけでは生きてゆけないが、英語力を磨けば、グローバルで活躍する道は早い。

### 【E社講師】

タイで4年間の海外勤務を経験したが、その経験から言えることは、語学が堪能であるからグローバル人材ということではない。語学が必要なツールであることは間違いないが、総合力がないとグローバルな対応はできない。そのためには、「郷に入れば郷に従え」式の柔軟な対応も含めて異文化を理解しようとする力、環境に適應する力などが重要になってくる。特に若い皆さんには、チャレンジ精神、失敗してもやってみることができる力を身に付けていてもらいたい。

(注) 四経連「グローバルチャレンジセミナー」は、四国経済連合会が開催。香川大学、徳島大学、鳴門教育大学、愛媛大学、高知大学、高知工科大学、四国大学、松山大学、徳島文理大学の学生を対象に、四経連会員企業の海外実務経験者が講師となり、具体的体験をもとに海外事業に挑戦する必要性、面白さ、外国の違った価値観や文化を持つ人たちとのコミュニケーションの重要性などについて講演。上記は平成24年10月、平成25年11月に実施したセミナーからの抜粋。

(参考5) TOEFL (iBT) の国別ランキング

[ アジア内順位 (30 カ国中) ]

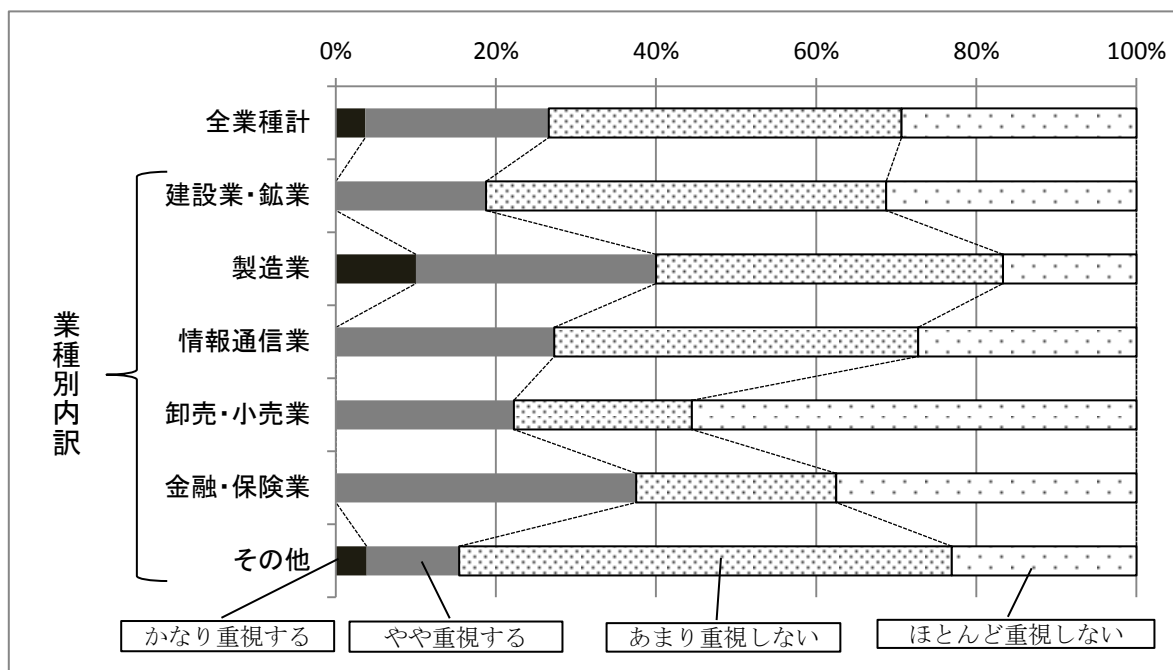
| 順位  | 国名                      | TOEFLスコア<br>(※) |
|-----|-------------------------|-----------------|
| 1位  | シンガポール                  | 98              |
| 2位  | インド                     | 92              |
| 3位  | マレーシア<br>パキスタン<br>フィリピン | 88              |
| :   |                         |                 |
| 9位  | 韓国                      | 81              |
| :   |                         |                 |
| 16位 | 中国                      | 77              |
| :   |                         |                 |
| 24位 | アフガニスタン<br>モンゴル<br>ベトナム | 73              |
| 27位 | 日本                      | 70              |
| 28位 | ラオス                     | 67              |
| 29位 | タジキスタン                  | 66              |
| 30位 | カンボジア                   | 63              |

(※)TOEFL (iBT) は 120 点満点

(米国 ETS が 2010 年 1 月～12 月に実施した TOEFL テストの集計結果より)

(参考6) 企業が大学新卒人材に求める外国語能力

新卒人材に求める資質・能力のうち「外国語の運用能力を実用レベルで身に付けている」ことの重視度



出所：四国の企業の大学新卒人材の採用ニーズ・評価に関するアンケート調査（参考3と同じ）

## (参考7) 先進的な大学の特色ある教育プログラム

### ① 国際教養大学（秋田県秋田市）

- ・平成16年4月に開学した公立大学法人。設立主体は秋田県
- ・国際教養学部のみ単科大学
- ・入学時期が4月と9月の年2回など独自の入試制度を実施

### ○ 授業は全て英語のみ、海外留学を義務化、留学生との共同生活を1年間実施、少人数教育を徹底

#### 【大学が目指す人材像】

- ・英語のコミュニケーション能力と幅広い教養と批判力を身につけた人材を育成。

#### 【特色ある教育プログラム】

- ・授業は全て英語で講義を行い、開講科目は社会科学から人文科学、自然科学など幅広い。
- ・在学中に全員1年間の海外留学を義務付け。提携大学（平成25年4月現在41カ国・地域の149大学）との交換留学制度により留学先での授業料は免除。
- ・新入生全員が1年間を大学の敷地内にある学生寮で外国人留学生と共同生活し、社会性、コミュニケーション能力を育成するほか、留学前から日常的に国境を越えた異文化交流を体験。
- ・自分で考え、主張する能力を磨くため、少人数教育（1クラス15人程度）を徹底し、双方向型授業を展開。
- ・課題解決型学習では、少人数グループに分かれて地域社会が実際に直面する課題を取り上げ、課題解決にチームで取り組む。講義、ディスカッション、現地調査、データ整理・分析、レポート作成、発表を通じてコミュニケーション力、調整力、複眼的分析力、協調性、リーダーシップ、問題発見能力、課題解決力を養成。
- ・24時間365日オープンな図書館やコンピュータールームなど、学生が勉強に集中できる環境も整備。
- ・卒業要件が厳しく、4年間で卒業できる学生は5割程度。
- ・地域への貢献として、秋田県内小中学生の英語力向上や国際理解促進、小学校の英語教員向けの英語研修などの取り組みを実施。

[ヒアリング調査時期：平成25年9月]

## ② 北陸先端科学技術大学院大学（石川県能美市）

- ・学部を持たない我が国初の国立大学院大学。平成2年10月に開学
- ・知識科学研究科、情報科学研究科、マテリアルサイエンス科の3学科

### ○ 英語による授業比率が高い、海外研修等を積極支援、 主・副の研究テーマを課し多様な課題への適応力を養成

#### 【大学が目指す人材像】

- ・先端科学技術の確かな専門性ととも、幅広い視野や高い自主性、コミュニケーション能力を持つ、社会や産業界のリーダーを育成。

#### 【特色ある教育プログラム】

- ・英語による授業比率（全開講科目の45%）が高く、全ての研究科において英語だけで修了が可能。このため、外国人留学生の比率が約4割、教員の外国人比率は約2割と高い。これにより日本人学生の国際性や英語力を養成。
- ・29カ国、106機関と学術交流協定を締結（平成25年5月）。自校と海外大学の学位を両方取得できる「デュアルディグリープログラム」などを制定し順調に拡大。
- ・大学が費用を助成して学生の海外研修を積極的に奨励。全額費用負担する海外語学研修も拡充。
- ・主研究テーマに加え、関連分野の知識を修得し、幅広い視点から研究を行う能力を身に付けることを目的に「副テーマ研究」にも取り組ませ、多様な課題への適応力や応用力を養成。
- ・研究指導の際に幅広い視野を持てるよう複数指導教員制を採用（主指導教員、副指導教員、副テーマ指導教員）。
- ・「先端領域基礎教育院」を平成23年度に設置し、専任教員9名を配置して教養、英語コミュニケーション、キャリアに関わる3部門44科目（平成25年度）を開講。これにより幅広い視野やコミュニケーション力などを育成。
- ・附属図書館は24時間365日利用可能。
- ・厳格な成績評価、学生による授業評価の相乗効果による修了者の質保証。
- ・就職した卒業生に定期的にアンケート調査を行い教育効果と企業ニーズを把握。

[ヒアリング調査時期：平成25年10月]

グローバル時代の企業が求める人材の育成について（提言）  
～大学教育への期待～

---

平成 26 年 11 月

四国経済連合会

高松市丸の内 2 番 5 号  
（ヨンデビル本館 4 階）  
TEL（087）851-6032

---